

# 校名：東京学芸大学附属竹早小学校

所在地：〒112-0002 東京都文京区小石川4-2-1

電話番号：03-3816-8941

記載日：平成28年5月18日

記載者：彦坂 秀樹

記載者役職：副校長

本校の校風、おおまかな、特色について：

## 1. 性格と任務

本校は、教員養成を目的とする東京学芸大学にある附属学校園の一つで、今年で創立116周年を迎える。隣接する附属幼稚園竹早園舎と幼小一貫の教育を実現しており、同じく隣接する附属竹早中学校との連携を密にした教育を推進している。

本校は、公の義務教育機関として初等普通教育を行うことを任務としているほか、国立大学の附属学校として、以下の二つの大きな使命を担っている。

その一つは、国の拠点校および地域のモデル校となるべく、本学と一体となって、また、文京区教育委員会と連携し、先導的・開発的な教育研究を推進することである。

その二は、本学の学生に教育実習の場を提供し、教員として優れた資質をもった人材を育成することである。

本校は、この二つの附属学校としての使命を責任持って遂行することにより、我が国初等教育界に貢献しようと努めている。

## 2. 校訓「誠」と教育目標

本校は、創立当初より「誠」を校訓としている「誠」の1字を掲げ、時世の推移、思潮の変転にもかかわらず、星霜百年に亘って「誠」の精神を貫いた教育にあたり、今日に至っている。校訓は、児童のためだけに掲げているわけではなく、教職員、保護者にとっても「よりどころ」となるものである。本校が常に健全な社会であるよう、学校に関わる全てのものが常に「誠」を具現するよう努めている。その「誠」の精神を教育の具体的なものとするために、『「自ら学び、ともに手を取り合い、生活を切り拓く子」の育成』という教育目標を掲げている。

## 3. おおまかな特色

本校では、「はじめに子どもありき」を基本姿勢とし、児童一人一人の思いや願いを大切にした教育を展開している。日々の教育活動はもちろん、本校独自のだけのことタイム、竹の子祭・キッズフェスティバル、竹早祭、四季の奥日光移動教室（春－4年生、夏－3～6年生、秋－5年生、冬－6年生）などの行事においても、縦割り活動を大事にしながら、児童の主体性を重視した取り組みを行っている。

研究面では、同じ敷地内に隣接する附属幼稚園竹早園舎、附属竹早中学校と一体となって、「主体性を育む幼・小・中教育の連携」をテーマとする教育研究に意欲的に取り組む中で、幼児・児童・生徒の11年間の成長・発達を見とり、個に応じた適切な支援を行う中でより望ましい幼・小・中教育の接続・連携のあり方を追究している。研究の成果として作成された連携カリキュラムについて、現在、検証を進め、本年度は、そのまとめの年と位置づけている。

また、本校は、文科省から教育課程特例校の指定を受け、児童自らが追求する「自己実現活動」を教育課程の中核に据え、主体性を育みつつ、「生活の中で生きてはたらく力」の育成に重点をおいて教育活動を進めている。

本校の卒業生の活躍状況について： 追跡調査は特にしていない。同窓会からの情報  
 昭 13 年次卒 Sさん (料理研究家), 昭 46 年次卒 Oさん (指揮者), 昭 54 年次卒 Kさん (オペラ歌手), 昭 57 年次卒 Kさん (マリンバ奏者), 昭 61 年次卒 Tさん (宝塚)

本校の勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻った後の活躍状況について  
 公立学校教諭・副校長から校長へ, 教育委員会指導主事・文科省調査官へ, 東京学芸大学, 他大学の准教授, 教授へ 等

魅力ある, または, 今後, 公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みについて

## 東京学芸大学附属竹早小学校

成長の4ステージ											
校種	幼稚園		小学校					中学校			
学年	4歳	5歳	1年	2年	3年	4年	5年	6年	1年	2年	3年
ステージ	第1ステージ 4歳～小2前期 やりたいことを思う 存分やろうとする		第2ステージ 小2後期～小4前期 集団と自分との 関わりにひたる			第3ステージ 小4後期～中1 集団との関わりの中で 自分とは何かを意識する			第4ステージ 中2～中3 集団の中で 自分らしさを追究する		

### 主体性を育む幼・小・中連携の教育

キーコンピテンシーの視点から, カリキュラムを検証する  
・ 幼児から15/16年間のつながり ・ 社会生活に異文化集団で交際する ・ 自然生活に学ぶ

実践研究部会

幼小接続分科会

小中接続分科会

言語グループ 社会グループ 自然グループ 健康グループ 表現グループ 人間グループ

発達研究部会

理論研究部会

調査事例研究部会

#### 教育実験校

- 幼・小・中連携教育
- 教育課程特例校「自己実現活動」
- 個の興味関心を探求する活動
- 大学との連携：教科グループとの協力研究  
OECDと大学共同研究への参画, HATOプロジェクト, 貧困問題関連プロジェクト

#### 特色ある活動

- 縦割り班による行事・活動
- 3年生以上の夏の林間学園
- 幼～2年によるキッズフェスティバル
- 個人選択種日を取り入れた竹の子祭
- 竹早祭  たけのこタイム

#### 教育実地研究

- 3年時基礎実習
- 4年時選択実習

#### 地域貢献

- 区小研の参加・共同研究
- 区教委3年時研修の講師
- モデル授業の公開
- 国内外の視察受け入れ

### 1. 幼小中連携教育

竹早地区の幼・小・中連携研究は, 1986 (昭和 61) 年の発足から, 実に 29 年の歴史がある。その歩みは大きく 6 期に分けることができ, 「連携カリキュラム」の創造」をテーマとした取り組みは, その第 5 期にあたる。

第 5 期 (2006 年から 2012 年) では, 研究組織や運営規則といった研究体制の整備を行った。ここでの, 幼・小・中各校種の文化を尊重し, 配慮した研究体制づくりが, 現在の円滑な研究活動を支えているとあってよい。「連携カリキュラム」の作成は, 主体性の発達に関する発達研究と連携教育の実践に関する実践研究の, 理論と実践の両面から取り組み, 2012 (平成 24) 年度にその一応の完成に至った。その過程において, 発達研究では, 主体性の成長過程を 4 ステージ・8 ステップで捉え, まとめることができた。

2013（平成 25）年度から、第 6 期として「連携カリキュラムの検証」をテーマに研究を進めている。これは、作成したカリキュラムが本当に主体性の育成に貢献しているのかを検証し、「連携カリキュラム」を改善していく必要があるという問題意識に基づいている。2016（平成 28）年度は、その最終年度に当たり、連携教育・研究を進めるための視点を整理し、提案する予定である。

## 2. 「自己実現活動」

自己実現活動は、幼児期の教育から小学校教育における幼児・児童の発達や学習の連続性を踏まえ、幼児教育における総合的な学習や生活の経験を基盤に各教科・道徳・総合的な学習の時間や特別活動の時間をも含めた教科横断的・総合的な様々なテーマを取り上げ、自ら目標を見だし、他者との共同的な関わりの中で自己の目標の実現を探求していくための活動である。

## 3. 大学・地域との連携した研究

「OECD との共同による次世代対応型教育モデルの研究開発」では、モデル授業として特別活動、道徳の授業を検討し、撮影した。特に特別活動においては、本校独自の児童が主体的に取り組んでいる行事を発信することができた。「経済的に困難な家庭状況にある児童・生徒」へのパッケージ型支援に関する調査研究プロジェクトでは、CCSSと本校有志教諭による教材等のカリキュラムパッケージ開発に着手している。現在、国語系、保健体育系、社会科系でこの問題の教育内容化を進め、授業モデルとしてのカリキュラム化を検討している。

また、文京区教育委員会と連携し、区の研究会に全員が参加するだけでなく、文京区の3年次研修の講師を毎年本校の教諭が担っており、日常的な参観者も受け入れている。

## 4. 竹早小学校の特別活動

本校の特別活動で大切にしているのは、年間のカリキュラムの中に、①縦割りによる異年齢集団での活動、②学年・学級を基盤とした同学年による活動、③個の興味・関心が追求できる活動の3つをバランスよく配置しているところにある。

児童は、学校という集団はもちろん、学年、学級、縦割り班という集団に属することになり、それぞれの集団の中での自分の役割や責任などを感じることができるよう配慮している。このことは、各自が自分の存在意義を感じ、自分の存在に自信をもったり、自分がその集団の中で大切な存在であると感じたりできるように考えた取り組みである。同時に、一人一人の存在も大切に、個の興味・関心が追求できる時間も同様に大切にしている。

### （1）縦割りによる異年齢集団での活動

元来、少子化や広い通学区域から通ってくることによる地域の子どもたちとの関わり方の弱さに対応することを考慮した取り組みである。

年度初めに、1組グループを16、2組グループを16に分けて、6年生を中心とする32の『縦割り班』を構成している。この縦割り班で学校行事に参加したり、日常の清掃活動や月に1度程度の昼食を共にしたりする機会を設け、児童同士の関係を深める場としている。縦割り班では、6年生の班長を中心として様々な取り組みを班のメンバーと相談して決める。6年生がリーダーシップを発揮して班を動かす姿を下級生に見せることで、下級生はあこがれを感じ、同時に、いずれは自分たちが班をリードするのだという自覚をもたせることにつながっている。

### （2）学年・学級による活動

4年生以上に、学年による奥日光における宿泊活動を設定している。学年で協力して行事や生活をつくり、互いの関係を深めることにつながっている。

また、6月に行われる体育的行事である、キッズフェスティバルおよび竹の子祭においても、学年での演技（表現）をつくり、発表する場を設定している。様々な意見を出し合い、互いに納得した上で練習に取り組み、堂々と表現する姿が見られている。

文化的行事として、11月に『竹早祭』を設定している。こちらは、学級毎に取り組む行事である。学級毎にテーマを設定し、保護者や他学年、他学級の参観を意識して発表の内容や形式を決め、発表するのである。

### （3）個の興味関心を追及する活動

4年生以上のクラブ活動的な取り組みを、本校では、たけのこタイムとしている。通常クラブ活動は、異学年による同好の児童集団で構成されるが、本校の場合は、異学年による関わりは縦割り班で十分に保障されていることもあり、本活動では、異学年の集団を構成すること以上に、個の興味・関心を保障することを大切にしている。また、児童にとっての興味・関心は刻々変化することも考慮し、1年間固定した活動に取り組むのではなく、活動内容を毎回申告制として変更できる前期と、連続して取り組む後期の、前後期制をとっている。

### 地域において、現在、本校はどのような存在であるか

本校は文京区にある国立附属小学校の中で唯一、文京区小学校教育研究会に正式に所属している。各教科・領域においては、毎年研究授業者をはじめ、研究グループのチーフ、副部長、講師などを務め、積極的かつ先導的に研究を進めている。また区主催の教職員体育実技研修会にも参加し、文京区の小学校教員と密接な関係を築いている。

平成25年度より文京区から要請を受け、区3年次研修の授業研究会における講師を各教科主任を中心に本校職員が務めている。平成26年度より近隣の金富小学校からの要請を受け、提携を結び、若手教員による空き時間を利用した本校教諭の授業参観も実施している。

このような状況を鑑みても、本校は文京区において、確固たるポジションを確保しており、今後も貢献を期待されている存在であるといえる。

### 附属学校の存在意義、本校の存在意義について

学校事情により、全ての公立小学校が常に実習生を受け入れることは難しい状況において、本校は毎年、安定して多くの実習生を受け入れ、教員養成を行ってきた。本校は長年蓄積してきた教員養成のノウハウをもっており、これらは公立小学校に提供することで、初めて実習指導を行う教員であっても確実な実習指導を行うことができるものとする。

また大学とも連携しながら、教科研究はもちろん、HATOプロジェクトやCCSSプロジェクト、「日本における次世代対応型教育モデルの研究開発」プロジェクトにおいて、理論を実証する実践の場を提供している。特に「日本における次世代対応型教育モデルの研究開発」プロジェクトでは、特別活動、道徳の授業実践を担当した。教育的な課題が山積している中で、大学と附属学校という密接な関係を生かして、フットワークの軽い対応を心がけている。

また幼小中の連携の必要性が叫ばれて久しいが、実際その連携の進み具合は地域によって大きな差がある。本校は同じ敷地内にある附属幼稚園竹早園舎及び附属竹早中学校と長年連携研究を継続しており、その研究成果を毎年公開研究会を通して発表している。今後も連携研究の二ーズが拡大することが予想され、本校及び竹早地区の存在意義は大きいと考える。